

10 佐渡の供奉者と火葬塚

これまで皇室の伝統とはいかなるものかを知る手がかりとして、具体的に順徳天皇の事績・著作を垣間みてきた。その伝統、とくに敬神崇祖の精神は、歴代天皇の大切にされた儀式や行事などにより、また私どもの祖先の努力によって、今日に伝えられた。しからば、これからわれわれは、それをどのように受け継ぎ、どのように未来へ伝えていったらいいか、ということも考えなければならぬ。

先般、私は佐渡にまいって、大へん心を打たれたことがある。その機会に承久当時の実情を調べたところ、順徳天皇が都を追われたとき、本来随従すべき人のなかに、嫌がって行かなかつたり、途中まで行きながら引き返してしまった人も少なくないが、もちろん佐渡までお供をして、二十一年間にわたり奉仕した人も多い。そのなかに和氣有貞という人物がいる。

この有貞は、奈良時代の終わりから平安時代の初めにかけて、道鏡の野望をくじいて皇統を護りぬき、都を平安京に遷して京都を造るのに大きな働きをした和氣清麻呂の子孫である。その人が侍医として、順徳天皇をお護りするために佐渡へ渡っている。そののみならず、その従兄弟にあたる和氣長成という人物も、侍医として後鳥羽上皇に従い、隠岐へ渡っている（七〇ページ）。

すなわち、命がけで皇統を護持した和氣清麻呂公の精神が、四百年後の鎌倉時代の初め、その子孫に伝わり、一人は隠岐で、一人は佐渡において、それぞれ上皇のために近くで奉仕しているのである。そういう事実のもつ重い意味を、このたび佐渡へ行った機会に、あらためて認識することができた。

順徳天皇にとつて、佐渡での生活は大へん苦しい二十一年であったにちがいない。しかし、せめても進んで遠島の謫地へ赴き、お側近くに仕えていた人がおり、しかもそれが和氣清麻呂の子孫であったというところに、日本の伝統が永く続きえてきた理由の一端をみる事ができるように思われる。

もう一つ、佐渡で感銘を受けたのは、御火葬塚と呼ばれている真野御陵のことである。仁治三年（一二四二）、順徳天皇が亡くなると、ただちに火葬に付され、その遺骨は京都へ運ばれて、大原の御墓所に納められた。しかし、佐渡でも、遺骨の一部を納めて「御火葬塚」と称し、そのあたりを大事にしてきたが、室町時代から江戸時代の初めにかけて、しだいに荒れてしまったようである。

けれども、江戸前期の延宝六年（一六七八）、その状況を残念に思った佐渡国分寺と真輪寺の僧侶が、何とかこれを復興したいと思ひ、時の佐渡奉行に願ひ出た。すると、幸い奉行の曾根五郎兵衛は道理のわかった人で、二千五百坪にもわたる周辺の土地を寄付して、その御火葬塚を修復している。歴代天皇の御陵は、奈良でも京都でも、中世から近世にかけて荒れすさんでいた。しかし、はるか都を離れた佐渡では、御火葬塚が守られていたのである。

ちなみに、江戸後期の寛政十二年（一八〇〇）、はるばる佐渡を訪ねて、そのこと

を知った蒲生君平は、大へん感動して山陵の研究に励んでいる。また、幕末の嘉永五年（一八五二）には、吉田松陰も佐渡へ渡り、漢詩に「六百年後、壬子の春。古陵に來り拜す遠方の臣。なほ喜ぶ、人心つひに滅せず。碑、今に事を伝へて新たなるを」と詠み、順徳天皇の遺跡と精神が、佐渡で今なお大事に守られていることを知り、非常に感激している。

私は、今回（平成三年）初めて佐渡を訪ねたが、黒木御所も真野御陵も、きちんと護持されている。しかも、戦後長らく御陵守りをされていた山本修之助翁が健在で、そのお宅を訪ねることができた。山本さんは今年満八十八歳。なおかくしゃくとしておられ、佐渡の順徳上皇の遺跡を守ることにについて、いろいろな苦勞を話してください。私は、なるほどこういう方々の努力によって、大切な遺跡も、また長年の伝統というものも守られてきたことを、まざまざと知ることができた。

じつは、さきほどのべたように、順徳天皇が四十六歳で亡くなられたのは、西暦一二四二年（仁治三）、旧暦の九月十二日のことである。これを新暦に換算すると、平成四年の十月十四日で、満七百五十年ということになる。じつはつい先日、それに気づき、この機会に順徳天皇のことを深く知りたいと思いたって、佐渡へ出向いたのである。

そのとき山本修之助翁は、「よく来てくれた。自分は五十年前の昭和十七年十月、順徳天皇七百年祭のお手伝いをして、ほんとうに多くのことを学んだ。しかしながら、五十年後の今日、そんなことに関心を向けてくれる人があまりいないので、来年はどうしようかと思っていたが、あなたのような人がだんだんと賛同してくださるなら、なんとか長生きをして、来年（平成四年）の七百五十年祭を佐渡でさせてもらいたい」と言われた。こういう先輩たちの切なる思いを若い人びとにも伝え、その実現に向けて多くの人びとの心を結集すること、それも私どもが当面しなければならぬ課題のひとつであろう。

（注）本章は、平成三年（一九九一）六月四日、千葉県柏市の広池学園においておこなわれた「伝統の日」記念行事特別講演「順徳天皇の御聖徳を仰ぐ」の記録で、『モラロジ―社会教育資料』第一一八号（同年九月号）所載。

なお、順徳天皇七百五十年祭の記念行事は、平成四年秋、京都と佐渡でおこなわれ、その講演記録集「順徳天皇を仰ぐ」（拙稿「順徳天皇の著作に学ぶ」所収）が新人物往来社から、また学術論文集「順徳天皇とその周辺」（拙著「禁秘御抄」研究史・覚書」所収）が臨川書店から出版されている。